

地下鉄の些事

渡辺公暁

自動音声システムがスタッフを要請したので、私は電話を取りながら、キーボードを叩いて注文記録フォームを開いた。間山様はいつもどおりの手順で、必要なパソコンの仕様を指定した。聞き返すべき部分はない。

注文を終えると間山様は私をねぎらった。間山様は私にとっては単なる顧客ではない。四年前にこの職場に入つて最初に電話応対をした相手が間山様だった。そしてこの職場で最後に受ける電話も間山様からだ。

間山様は勤めている印刷会社の備品購入を任されているようで、間山様以外のひとが電話をよこしたことはない。そして間山様からの電話は、すべて私が取っている。ふだん職場にはもうひとり男の子がいるだけだから、これはたいした偶然でもないかもしれない。

だからこの四年のあいだにウェブプリンティング社から受けた注文は、すべて間山様と私とで取り交わしたものだ。デスクのモニタ上に並んだ注文データは、明日から私の手を離れる。パソコンの電話注文部門は今日で廃止になるのだ。

小売店に製品を置かず、電話やインターネットで受けた顧客からの注文に応じて部品を組み立ててパソコンを売るのが、私の会社の方針だった。しかしこれは少し合理的すぎたようで、店頭で製品を見たいという顧客の声が聞こえていた。これに応える形で、会社は創業以来の方針を転換して小売店と契約を結び、電話注文部門を切り捨てることにしたのだった。

「明日からはオンライン注文のみになるんでしたね」

間山様の声を聞くのも今日が最後だ。私は部門の廃止を改めて話した。

「メールでもよかったですね、つくせが、抜けませんで。もうかなり長いあいだ、電話でお願いしていますよね」

いつもなら事務手続きが済んだら忙しそうに電話を切ってしまう間山様が、今日はよぶんなことを伝えてくれる。終業時間が近いからだろうか。

佐伯さん、いろいろむちやを言ってしまう。ありがとうございました」
札を返しながら、私はむちやの教々を思い浮かべていた。私がこの職場に勤めはじめたころは、間山様も機械に疎かったようで、要領を得ない注文にいらだつたこともあった。一日おきにサポート依頼を頼まれた月もあった。最近落ち着いてきたが、焦ると間山様の声はよく裏返る。スーツが板についてきたぐらいの若い男のイメージを、私は漠然と抱いていた。間山様のことは、名前と声、それに勤め先と部署ぐらいしか知らないから、イメージは日によって変わった。

間山様は私のイメージを持っているだろうか。佐伯という苗字はどういう響きなのだろう。

では、またよろしく願います」

オンライン注文部門には私は配属されない。だから間山様と連絡をとることはもうない。型どおりの返事のと、それを伝えるべきかどうかためらった一瞬のあいだに、電話は切れてしまった。

受話器を置いたあと、私は帰り支度を始めながら、間山様の注文データが出ている画面を眺めていた。間山様の勤め先は都内にある。こことは区が違うが、日比谷線を使えば行くのにそう時間はかからないだろう。

退社して、私は荻窪方面行きの電車に乗った。